

氏 名 張 永勝

学 位 博士 (英語学)

学位記番号

学位授与年月日

審査研究科 外国語学研究科

論文題目 Margaret Cavendish' s Use of the Auxiliary Verb "To Have" in Her 1662
Plays

論文審査委員 (主査) 大東文化大学教授 北林 光

(副査) 大東文化大学教授 大月 実

(副査) 大東文化大学教授 渡辺良彦

(副査) Baruch College (CUNY) 准教授 Wayne Finke

博士論文 審査報告

1. 本人の履歴、研究の経緯、および学術業績

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2. 論文の要旨およびその特色

張永勝氏は、本論文の中で、マーガレット・キャベンディッシュの1662年に出版された戯曲集を扱い、様々な文化的背景から、「have+過去分詞」の多様な意味を地理言語文化学的な視点から分析した。地理言語文化学は、ある特定の地域・時代に、特定の人間が自分の文化をどのように理解していたのかを扱う研究分野である。張永勝氏は本論文で、マーガレット・キャベンディッシュの1662年の *Plays* を研究した。作品に出てくる舞台は色々であるが、執筆していた場所はロンドン、パリ、アントワープということで、地理的に関係する地域はそこに当たる。侯爵夫人である彼女の文化的環境は英国の王室と深い関係があった。また、家庭教師以外に、彼女の時代に男性が受けられるような学校教育はなかったし、父親は彼女が2歳の時に亡くなったために、彼女に家庭教師は雇われなかった。彼女が書き記しているところによると、彼女が受けた教育は家にいる親戚によるものとのことであった。こういうわけで、彼女は本を読んだり、書いたり、出版したりすることはあったが、学校での教育は受けたことがなかったのである。

張永勝氏が執筆した博士論文の特色は、17世紀の主要な文法書の多くを集め、「have+過去分詞」の説明を纏めた点である。その結果は、マーガレット・キャベンディッシュの「have+過去分詞」の使い方は当時の文法学者の説明からは離れていない例が多かった。しかし、全ての例がそうであるわけではないのである。そこで、以下で2つの例を比較してみよう。まず、よく出てくる単純な過去の意味しか表さない「have + 過去分詞」の例としては、彼女の戯曲に出てくる“Why this is the matter fool, thy Sister fool hath beaten her Maid fool, for kissing her Master fool.” (MC1662, 464)がある。この例では、“has beaten”に現在との関連性があるとは考えにくいのである。しかし、同じく彼女の戯曲に見られる“How do you know the Lord Singularity is such a gallant man? For he hath been out of the Kingdom this 7. Yeares” (MC1662, 7)では、“hath been” (‘has been’)は現代英語の現在完了と同じように使われているのである。

この博士論文は、文学作品を利用し、上述した地理言語文化学的視点から、「特定の一人」が関係する「ある特定の期間、および場所」に限定する。そのため、17世紀という歴史的な文脈における当時の言語使用を理解するために、マーガレット・キャベンディッシュと同時代の文法の説明を戯曲の対話を理解するために使用し、またそれを基に研究を試みたものである。

張永勝氏の博士學位論文は、7つの章で構成されている。第1章は博士論文の目的の説明である。本論文の目的は、「ニューカッスル・アポン・タイン公爵夫人であるマーガレット・キャベンディッシュ自身が助動詞 have を使うことによって何を理解していたか」を明らかにすることである。

第2章では、17世紀のイングランド文化の発達と歴史の全般の解説と、マーガレット・キャベンディッシュとニューカッスル・アポン・タイン公爵である夫について紹介している。

第3章では、英語で書かれた17世紀の主な利用可能な英文法書を紹介している。

第4章では、方法論について、自身の提唱する Conversation Chunk Analysis について解説している。

第5章では、マーガレット・キャベンディッシュの「be+過去分詞」は、場合によっては受身形ではなく「have+過去分詞」の役割を果たす場合が多いという調査結果について説明している。(これは当時の英語の特徴でもある。)

第6章では、マーガレット・キャベンディッシュの「have/had+過去分詞」の用法の調査結果を、OEDによる「have+過去分詞」形式の分類に当てはめた場合どの意味になるかについて説明している。例えば、OEDの説明の内、「現在時制の助動詞 have と他の動詞の過去分詞」の例は、*Plays* に1027回登場するが、634回は過去形の意味であり、393回は別の意味になる。

「have+過去分詞」の文法パターンは、時代を超えて、地域をも超えて似ている場合もあるが、目に見えない隠された違いが存在することもある。この章では、マーガレット・キャベンディッシュの戯曲の対話に出てくる「have/had+過去分詞」の様々な例を見つけてその一つ一つの表面下の意味が分かるように戯曲のテキストを必要なだけ分ける分析法を提案し、張氏はこのように分けられた単位を conversation chunk と呼び、Conversation Chunk Analysis という分析を提唱した。分けられた単位の大きさは様々であるが、この分析法により、マーガレット・キャベンディッシュの

「have+過去分詞」の例文の表面下の意図的な意味が具体的にどのような意味なのか解説している。例えば、以下の対話が一つの chunk である。

SIR HUMPHREY BOLD. What say you Ladyes, are you resolved?

LADY WAGTAILE. No, No, we will not go with you to such places now; but I will carry you to a young Lady whose Father is newly dead, and hath left her all his Estate; and she is become a great heir.

SIR ROGER EXCEPTION. Perchance Lady she will not receive our visit, if her Father be newly dead. (MC1662, 6)

ここでは、“are you resolved”, “is newly dead”, “hath left her”, “is become” と “be newly dead” は、それぞれ、現代英語形式では ‘have you decided’, ‘has recently died’, ‘has left her’, ‘has become’, ‘has recently died’ となる。しかし、時間との関係を考えると表面下の意図された意味は 2 つに分けられる。“are you resolved”, “is newly dead”, “hath left her” と “be newly dead” の意図的された意味は過去形の ‘did you decide’, ‘recently died’ と ‘left her’ である。“is become” の 1 例のみ表面下の意図された意味は現代英語の現在完了と同じである。ここで、例えば “hath left her” (= ‘has left her’) は文脈から推して過去の意味 ‘left her’ が意図されていることは明らかである。亡くなった父親は戻ってくることはないのであるから、現代英語からすると過去時制で表現されねばならないからである。

第 7 章は結論である。

本論文の構成は以下の通りである。

Acknowledgments

1 Introduction

1 A General Description of This Study

1.2 The Research Questions

1.3 The Research Purpose

2 A Historical Overview

2.1 Concerning the 17th Century

2.2 The Duke and Duchess of Newcastle-upon-Tyne

3 Literature Review

3.1 Introduction

3.2 The Sixteenth Century English Grammar

3.3 The Seventeenth Century English Grammar

3.4 The Auxiliary Verb *to have* in the Late Sixteenth Century Grammar

3.5 The Auxiliary Verb *to have* in Nineteenth Century Grammar

3.6 The Oxford English Dictionary

4 Methodology

4.1 Theoretical Framework

4.2 The Form of the Auxiliary Verb *to have* Occurring in Margaret Cavendish’s 1662 *Plays*

5 Findings

5.1 Preliminary Explanations

5.2 *Be* + Past Participle as the Present Perfect Have + Past Participle

5.3 *Have* + Past Participle Usage

6 Discussion

6.1 Chapter Purpose

6.2 OED Structural Categories

6.3 Utterance construct Categories with “have + past participle”

6.4 Conversation Chunk Analysis
7 Conclusion
7.1 General Conclusion
7.2 Points for Improvement
7.3 Originality of the Research Undertaken
References
Appendix

本論文の結論は以下のようにまとめられる。マーガレット・キャベンディッシュの「have+過去分詞」構文の使用は、17世紀の文法家による「have/had+過去分詞」の説明と合致しないことも多くあり、場合によっては彼女の用法は独特で、17世紀の英文法と21世紀の英文法のいずれからも説明ができない事例もある。一方では、英国の当時の大学で一般的に理解されていた英語の規則を反映している。もう一方では、マーガレット・キャベンディッシュの様々な「have/had+過去分詞」の使用には、彼女が交際していたその時代の学校教育を受けていない女性たちの言語使用の影響も見られるかもしれない。したがって、この論文は、マーガレット・キャベンディッシュの「have/had+過去分詞」の使用には（様々な用法の）混合があるように思われる、と結論付けている。

3. 論文の審査内容および評価

張永勝氏の研究は、17世紀半ばのイギリスで活躍した女性小説家・戯曲化・詩人であるマーガレット・キャベンディッシュの戯曲に現れた「have+過去分詞」の意味を、当時の英文法を踏まえつつ、種々の用例をそれらの生起する文脈との関連性の上で明らかにし、その類型化を試みたものである。17世紀半ばという特定の時代のイギリスにおける教養ある層が用いる英語の中でも、have+過去分詞形式による完了形に関する地理言語文化学的研究である。マーガレット・キャベンディッシュの戯曲に関して、同じ時代に生きた諸文法家の観点から見た表面上の意味とその背後にある意図の間の関係を上手に説明してある。張永勝氏は、選んだ戯曲の言葉遣いに関する洞察に満ちた、説得力のある分析を読者に提供している。張永勝氏は自身の観点を裏付けるための十分な参考文献（特に17世紀の英語で書かれた英文法書）を提示している。論文の中で提唱されている戯曲に対するConversation Chunk Analysisは、定義や単位認定の基準設定、方法の明確化などの課題は残るものの、今後さらなる追究が期待されるものである。しかしながら、表面上の内容だけでなく意図をも適切に理解するためには、様々な長さのあるテキスト・チャンクに分けて分析するやり方の価値は示されたと判断できる。また、一作品の事例に包括的な処理を施し、今後の研究の先鞭をつけたという意味で意義が認められる。したがって、当研究は通時的な研究ではないが、一人の作家による「have+過去分詞」構文の使用法を分類し精査することにより、マーガレット・キャベンディッシュが「have+過去分詞」の完了形をどのように理解していたか、その一端を明らかにしている点では、張氏の発想に独自性が見られ、助動詞haveの一作家の実際の用例に関する力作である。博士論文として評価に値するものと判断する。

4. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（英語学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以上